

身が働かれねば、物に心が止らず染まぬやうに能く使ひなして、捨置て何所へ
 なりとも退放せよ云ふ義なり、物に心が染み止るによつて染ますな止まらず
 な、我身へ求め返せよ云ふは初心稽古の位なり、蓮の泥に染まぬが如くなれ
 泥にありても苦しからず、よく磨きたる水晶の玉は泥の内に入ても染まぬや
 うに心をなして行き度き所にやれ、心を引つめては不自由なるぞ、心を引し
 めて置くも初心の時の事よ、一期其分では上段は終に取られずして下段にて
 果てるなり、稽古の時は孟子が謂ふ不見放心と申す心持能く候、至極の時は
 邵康節心要放と申すにて候、中峰和尚の語に見放心とあり、此意は即ち邵康
 節が心をば放さんことを要せよと云たると一つにて、放心を求めよ引とゞめ
 て一所に置くなと申義にて候、又具不退轉と云ふ、是も中峰和尚の言葉なり
 退轉せず替らぬ心を持てと云ふ義なり、人たゞ一度二度は能く行けども、
 又つながらて常に無い程に退轉せぬやうなる心を持てと申事にて候、

急水上打毬子念々不停留

「中峰和尚」は
 元の杭州天目
 山中峰明本禪
 師なり

と申事候、急にたてまつて流るゝ水の上へ手まりを投せば、浪にのつてばつ
 ばと止らぬ事を申義なり、

前後際断

と申事候、前の心をすてず、また今の心を跡へ残すが悪敷候なり、前と今との
 間をばまつてのせよと云ふ心なり、是を前後の際を切て放せよと云ふ義なり、
 心とゞめぬ義なり、

内々存寄候事御諫可申入候由、愚案如何に存候得共、折節争と存及見
 候處、おらまし書付進し申候、

貴殿兵法に於て今古無雙の達人故、當時官位俸祿世の聞にも美々敷候、此大
 厚恩を寐ても覺ても忘るゝことなく、且夕恩を報し忠を盡さんことのみ思
 ひたまふべし、忠を盡すといふは、先づ我心を正しくし身を治め、毛頭君に二
 心なく、人を恨み咎めず、日々に仕出意らず、一家に於ては父母に能く孝を
 盡し、夫婦の間少しも猥りになく、禮義正しく、妾婦を愛せず、色の道をた

ち、父母の間おごろかに道を以てし、下を使ふに私のへだてなく、善人を用
 む近づけ、我足らざる所を諫め、御國の政を正敷、不善人をば遠ざくる様に
 するときは、善人は日々に進み、不善人もおのづから主人の善を好む所に化
 せられ、悪を去り善に遷るなり、如此君臣上下善人にして欲無く奢を止る時
 は、國に寶滿ちて民も豊かに治り、子の親をしたしみ、手足の上を救ふが如
 くならば、國は自ら平に成るべし、是れ忠の初なり、この金鐵の二心なき兵
 を、以上様々の御時御用に立ならば、千萬人を遣ふとも心のまゝなるべし、
 則ち先に云所の千手觀音の一心正しければ千の手皆用に立つが如く、貴殿の
 兵衛の心正しければ、一心の働自在にして、數千人の敵をも一劍に随ゆるが
 如し、是れ大忠におらずや、其心正しき時は外より人の知る事もあらず、一
 念發る所に善と惡との二つあり、其善惡二つの本を考へて、善をなし惡をせ
 ざれば、心自ら正直なり、惡と知り止ざるは我好所の痛あるゆへなり、或は
 色を好むか、奢氣隨にするか、いかさま心に好所の働さある故に、善人あり

とも我氣に合されば善事を用ゐず、無智なれども一旦我氣に合へば盡し用ひ
 好むゆへに、善人はありても用ゐされば無きが如し、然れば幾千人ありとて
 も、自然の時主人の用に立つ物は一人も不可有之、彼一旦氣に入たる無智
 若輩の惡人は元より心正しからざる者故、事に臨んで一命を捨てんと思ふ事努
 め不可有、心正しからざるもの、主の用に立たる事は往昔より不可承及こと
 ころなり、貴殿の弟子を御取立被成にも々様の事有之由、苦々敷存候、是皆
 一片の數奇好所より其病にひかれ惡に落入るを知らざるなり、人の知らぬと
 思へども、微より明かなるなしとて、我心に知れば天地鬼神萬民知るなり、
 如是して國を保つ、誠に危き事にあらずや、然らば大不忠なりとて存候へ、
 たとへば我一人いかに矢猛に主人に忠を盡さんと思ふとも、一家の人和せず
 柳生谷一郷の民背さなば、何事も皆相違仕るべし、惣て人の善し惡しさを知
 らんと思はゞ、其愛し用ゐらるゝ臣下又は親しみ交る友達を以て知ると云へ
 り、主人善なれば其近臣皆善人なり、主人正しからざれば臣下友達皆正しか

らず、然らば諸人みな無みし、隣國是を侮るなり、善なるときは諸人親むとは此等の事なり、國は善人を以て寶とすと云へり、よく御體認なされ、人の知る所に於て私の不義を去り、小人を遠ざけ賢を好む事を急に成され候はゞ、彌々國の政正しく、御忠臣第一たるべく候、就中御賢息御行跡の事、親の身正しからずして子の悪しさを責ること逆なり、先づ貴殿の御身を正しく成され、其上にて御異見も成され候はゞ、自ら正しくなり、御舍弟内膳殿も兄の行跡にならひ正しかるべければ、父子ともに善人となり、目出度かるべし、

取と捨とは義を以てすると云へり、唯今寵臣たるにより、諸大名より賄を厚くし、欲に義を忘れ候事努々不可有候、

貴殿亂舞を好み、自身の能に奢り、諸大名衆へ押して參られ、能を勤められ候事、偏に病と存候なり、上の唱は猿樂の様に出候由、また挨拶のよき大名衆をば御前に於てもつよく御取なし成さるゝ由、重て能く御思案可然歎、

歌に、「心ころ心迷はず心なれ心に心心ゆるすな」。

不動智神妙錄終

寶鏡窟之記

辭題

此書は白隱禪師が伊豆國賀茂郡手石村の寶鏡窟につきて記るされしものなれども畢竟是れ心要を述べられたるものに外ならざる也

編者 識

寶鏡窟之記

寶鏡窟は今現
に伊豆國賀茂
郡手石村にあ
り

寶鏡窟之記

白 隱 禪 師

經に曰く佛身法界に充滿してつねに一切群生の前に示現すと、然らば即ち目の見る處、總に是れ如來の清淨法身にあらすして何ぞや、しかるを都て見奉る事能はず、惠眼既に盲たる故なるべし、又曰く我常にこゝに住してつねに說法して無數億の衆生を教化すと、しからば即ち耳の聞く處、諸佛微妙の教體ならずして何ぞや、然るを都て聞奉る事能はず、天耳既に聾たる故ならずや、寛永の初め豆州賀茂郡手石村の漁翁つねに産業の拙きを恨み、深く來生の苦輪を恐れ、晝夜に念佛して怠る事なし、自ら云く漁獵は我が家業なり、念佛は我が私業なりと、常に船上にありても、終夜念佛して、動もすれば網する事もまた忘るゝ計りなりけり、いつの頃よりか貴き光の時々に海面に浮

百九十八

「無量壽尊」は
阿彌陀如來な
り梵語を阿彌
陀といひ譯し
て無量壽とい
ふ
「二大士」觀音
菩薩をいふ
「紫磨金」は金
の精なるもの
にして不壞な
るものをいふ

ぶを見る、漁翁是を怪みて船して彼の光の處に到れば岩窟あり、廣さ二丈ばかりなるべし、遙に窟中を窺ひ望むに、昏々として淺深を測る事能はず、潮に隨て開閉す、滿る時は一片の水波窟中に充つ、一日漁翁の潮勢のおつるを待て、畏づゝ彼の窟中に棹もて兩岩をさへて進み事數十笏、轉々進めば轉くらし忽然として股戰き、膽震るへ、心身驚き恐れて、正に正氣を失せんとす、茲において合掌跪坐して念佛する事數十聲、身心次第に平穩なる事を覺ふ、少焉あつて餘々として眼をひらけば、一遍の金光窟中に煥發して、瑤耀膽を照らし、異香翔しつべし、熟く見れば無量壽尊及び二大士をさへに端嚴殊特の妙相有て、紫磨金の聖容嚴然たり、窟中廣博なる事大虛の壘廓たるが如し、如來の身量何千尺と云ふ事を知らず、漁翁即ち悲泣念佛して、身心ともに消へ失せたるが如し、覺へず時を移す事數刻、乍ち怒濤の岸を打つ聲を聞く、既にして潮の洞口を塞がん事を恐れて、泣く尋容に別れ奉て、念佛しながら漕かへりぬ、扱て里人斯くなん告たりける程に、遠近驚き起ちて潮

の落ち河口のひらくを待ちて、行きて瞻禮する者ひさまさらず、正に窟中に入るに當て、涕淚悲泣感汗肌をひたし、念佛して伏しまるる者あり、打見ても興さめたる貌して守り居るもあり、怪しげなる貌して彼方此方見まわし冷笑もあり、是皆信心の淺深罪業の輕重に隨て、所見まちくなる故なり、彼の涕淚悲泣する底は、如來の身量或ひは三尺或ひは五尺乃至一丈乃至二丈紫金光聚の中に嚴然として立せ玉ふを拜し奉りたる者なり、是上品の行者なりと知るべし、又彼の打仰ぎて混らに念佛する底は、金色の聖容或ひは五寸或ひは七寸さらくと照輝て窟中に立せ玉ふを拜し奉る者なり、是中品の行者なりと知るべし、興さめたる貌して守り居けるは、金光をも拜せず、寶蓋をもさかず、混黑にくらく只鐵木などのかくなる者、或ひは三寸或ひは五寸目鼻の分ちもなく三つ並たち玉ふを見かりて、さしてもなき事をさやう聲らしく云ひ觸して多くの人々を欺き貶して勵しめける事よ、憎き漁人めが仕業なるぞかしなき興さめしたる者なり、是は下品の行者なりと知るべし、又彼のうろく

として彼方此方見廻し冷笑けるは、無智昏愚の下郎尋常に世を信せず、因果を知らず、少しばかり假名變紙など讀覺へて、荒唐のみ利て、物知りたてずる斷見外道の部類なりと知るべし、神明にも尊ばれ佛陀にも憐まれ玉ひにたりける惠心院の僧都の、大信は大佛を見、小信は小佛を見ると云ひおかれけるは、止事なく貫くも覺へらるれ、彼の人々の信根の淺深罪業の輕重に隨て、所見まちくなると思ふに毫釐も差ふ事なし、譬へは明鏡の臺に當て媚醜少しも遁れざるが如し、是故に寶鏡窟と稱し鏡岩と名づく、俗には近頃る彌陀窟と云ふ、或人の云く、我聞く如來は三身を具足し玉ふと、且つ夫れ寶鏡窟の如來の如きは、法身と云んか、報身とせんか、將又稱して化身と云んか、如來既に群生を利濟せんが爲に世に出現し玉ふとならば、城邑聚落いかにも人たち多かる處に現し玉ひて多くの人を利益し玉ふへきに、何ぞや遠境邊工人里もつゝかぬ處に雨をさけ風を恐れ、しばらく潮の落るを待つなる危き岩穴の中に應現し玉ふ事は何ぞや、又聞く番々出世の如來何れも開佛智見道の一事

「五眼」天眼、
肉眼、法眼、慧
眼、佛眼、これ
なり
「四智」大圓鏡
智、平等性智、
妙觀察智、成
所作智、これな
り

を以て本懐とし玉ふと、しかるを獨り無量壽尊のみ往生淨土の事を以て我等
を引導し玉ふ事は何ぞや、予曰く佛に三身あり、法身を以つて體とす、報化
の二身は用なり、今寶鏡窟の如來の如きは法身と云んも亦得たり、報化の二
身と稱せんもまた得たり、天堂地獄淨邦穢土山河大地佛界魔宮草木叢林有情
非情盡く是れ如來の眞法身、當所をはなれず常に湛然たりといへども見性の
上士に非ざるよりんば輒く見る事能はず、是故に諸佛報化の二身を現じて衆
生を引導す、禪定誦經念佛持戒分に隨て進修して怠らざる時は、情念止み思
想盡き、一心不亂の田地に到て、三昧發得し圓解煥發し、乍ち如來の眞法身
に契當す、此時に當て五眼俄に開明し、四智立處に成就す、是即ち開佛智見
道の當體にして、見性入理の一刹那なり、思想盡き情念休する時節を往と云
ひ、一心不亂の田地に到るを生と云ふ、如上の眞理現前して唯一乗の大事
目前に分明なるを來と云ふ、此時に當て行者心境不二理智冥合するを迎と云
ふ、然らば即ち來迎往生開佛智見畢竟同一模範なる者にあらずや、須く知る

「蛤網」彌勒、
婦念佛魚の因
縁卷末に詳記
す

へし、三身不二、不二三身、三世古今の間に見性せざるの佛因なく、見性せざる
の賢聖なき事を、禪定誦經念佛持戒皆是見性の助因なるべし、彼の黃卷赤軸
を執らへて佛經なりと偏執し、泥丸塑像を執らへて佛像なりと心得ひ人々は
夢にも曾て見る事能はず、是佛身の應現豈又城邑聚落をしも云んや、彼の觀
世大士の如きは蛤網の胎中に身を現し、瓢瓠の肚裏に跡を垂れ、遠境邊土金
砂灘と云へる處の馬郎が小婦と身を現し玉ひ、又海島邊鄙人多く住みける所
に念佛の魚といへるありき、漁者共多く濱邊に打ち寄り、高聲念佛時を移し
皆々一心不亂に到りける時、魚ども多く海面に浮ぶ、此時網を下るせば夥し
く魚を得、念佛の多少聲の高下に隨て魚を得る事もまた多少あり、是故に此處
の民、念佛を以て家業の如くす、傳へて云ふ、此魚彌陀の化現にして、無佛世界
の衆生を濟度し玉はん爲に斯の如きの善巧ありと、嗚呼佛菩薩の大悲善巧は
凡愚の計り知るべき事にしあらず、今此寶鏡窟の如來も、行者罪障の輕重信
心の精麁に隨て、品々に拜まれさせ玉ふと思へば、彼の島の念佛の魚に少し

も違わせ玉ふ事かは、熱と思ひまはせば身の毛起ちて恐ろしく奪く、頻に
悲嘆の涙ころこぼるれ、愚老杯も是よりは遙か遠國の者に侍り、此御佛の尊
き御有様を仄かに傳へ聞き奉りて、あわれ佛神の冥助もおはせよがし、足を
限りに彼の伊豆の國なる賀茂郡とかや云ふなる處までたどり行きて、彼の御
佛の貴き御影なりとも伏しかがみ奉りて、後の世の事をも歎き申度き事よと
思ひつゝけて、いつしか廻國の姿にやつし成して、漕れ來りて同行三五輩海
士の小船のあやしげなるを請ひ借きて、諸どもに窟中に入り念佛して伏し拜
み奉りにけるに、一目見奉りて伏ししづみて念佛しながらぐしくと泣出すも
あり、一目見奉りてより有難がりて感涙するも有り、一人は興さめ貌して方
々は何を目めてに感涙しては泣玉ふぞ、かのれは唯はのくらき計りにて
物こそ見つけ侍らぬ、如何にもしてかたし成りとも見届け奉りて和殿原が
如く有難かり度き事よとて、目おし拭ひ首ひねりまはしてかなたこなた見回
はし首べを搔もありけり、愚老が其時拜し奉りにたるは、ほの暗さ中に彼の

光のちらくとのみして、満月の御面も青蓮目の御眸も見へ分ち玉はで、御
佛の御影とおぼしきもの三たり立ち玉へるを拜み奉りて、少しは信心もさめ
心地しけるが、定て貴き事にやあわすらむと有難けに伏し拜みて佛念し侍り
にたりき、飯り來りて熟くと思ひかこちにけるは、七旬に近き者の遙々の
旅地を三途の罪障とも懺悔し、六趣の苦患をも歎き申度くてさまよひ來りた
る者を、御影をたにもはかくしく拜まれさせ玉はぬ事よと、少しは恨み申
す心地もさしかこりにたりしが、返して思へば三界無比の大聖、十力調御の
如來にて渡らせ玉ふものを、如何にや憎愛差別の御心のおはすへさぞ、差別
は却て我が信心の淺深にこそ依るへき者を、淺猿しくも恨み奉りし事よと思
ひ定めて、従前の罪障を懺悔し、當來の苦因を恐れて、至誠に專唱稱名する
事半時、再度び彼の巖窟に入り拜し申けるに、光明も相好も以前には遙に違
わせ玉ひて、一際殊勝におがまれさせ玉ひける程に、感涙肝に銘じ侍りき、
是より思ひ入りて澆季末代流轉常没の我等が爲には上もなき善知識にてわた

「十力調御二十
力とは是處非
處力、知業力、
三昧力、知根
力、智欲力、智
性力、至道力、
宿命力、天眼
力、無漏力、こ
れなり調御は
如來十號の一
にして調御は
夫の界にして
調御とは衆生
を調伏制御す
るの義なり

らせ玉ふものと、尊容に別れ奉りて頼みもなき歸命に何地へかうかれ行くべき、永く此處に在りて尊容につかへ奉りて、鬼にも角にも成りはてたらむには、またなき勝縁なるべき者とぞ、處々の靈場に詣ふで奉るべき望みも絶へはて、專唱稱名の外多事無く打成り侍りぬ、且又國々より御影拜み奉らむとて慕ひ來り玉へる人々の、浪風打つゞきたる頃しも参りわい玉ひて、風波の靜まるを待わび玉へる人々のいたわしさに、打寄り念佛して浪の晴れ間を待ち玉へがしの心に、處々勸進し申て、一字の草廬を營み、形の如く尊容を寫し奉りて堂上に安置し奉りぬ、願くは此勝縁に答へて、我等も及び一切の人々も諸ともに生死の魔網を破り、速かに一心不亂の田地に到りて、唯心の淨土に生して、己心の彌陀に値遇し奉らむ事、

惟時

寛延第三庚午歲佛生日

沙羅樹下剛提老納書

○蛤蜊の胎中に身を現しひし事

觀音持驗紀に曰く、唐の文宗、蛤蜊を嗜み、東南沿海頻年貢に入る。民、苦に勝へず、一日、御庖に一の巨蛤を獲、刀を以て劈くに開かず、之を叩けば乃ち張る、中に觀音の梵相あり、帝、愕然として命じて、金を以て檀香盆を飾りて、焉を貯ふ、後ち惟正神師に問ふ、師の曰く、物に虚應なし、乃ち陛下の信心を啓き、用を節して、人を愛するを以てするのみ、經に曰く、菩薩身を以て得度すべき者には、即ち菩薩の身を現じて、爲めに法を説くと。帝の曰く菩薩の身を見る、未だ説法を聞かずと。師の曰く陛下信するや否や。帝の曰く、馬ぞ、敢て信せざらむや。師の曰く、此の如く、陛下其説法を聞き玉ひ竟ぬと。帝大に悦び悟り、永く蛤を食することを戒む。因て天下の寺院に、詔りして、各觀音の像を立つ、則ち落伽從て來る所なり。

○瓢狐の肚裏に跡を垂玉ひし事

觀音新驗錄に曰く、總州多劫の地に、僧伽藍あり、樹林と號す、觀世音の

像を奉ず。俄に寺の災に値ふて、其の像悉く煨燼となる、何くとも無くして、煨燼の中に於て一の匏を生ず。民人剖つて之を視れば、内に大士の像あり、儼として寺に奉ずる所の者の如し。歎喜感嘆して、夕顔の観音と曰ふ。此方匏の花を夕顔と名くるを以て故に云ふ。

○馬郎が小婦と身を現し玉ひし事

観音持驗紀に曰く、唐の馬郎が婦は、陝右に出つ、是より先き、此地俗、騎射を習て三寶の名あるとを知らず。元和十二年に忽ちに美女あり。籃を挈げ魚を鬻ぐ、人競ふて之を要んと欲す。女の曰く、一夕に能く普門品を誦する者は、則ち吾れ之に歸がむと、黎明能く誦する者、二十四筮あり。復た授るに金剛般若を以するに、能く誦する者猶十人、乃ち更に法華の全經を授け、期するに三日に通徹することを以てす。獨り馬氏が子、之れを能くす、乃ち禮を具て婦を迎ふ。門に入れば女疾と稱し別房に止らんことを求め、須臾にして、便ち死し體即ち爛壞すれば、遂に焉を瘞む。數日にし

て紫衣の老僧あつて、葬所に至て命して啓き視れば、唯だ黄金鎖子骨のみ。衆に謂て曰く、此れは観音大士、汝が輩の障重を憫むが故に、方便を垂れて示現し、以て汝を化するのみと。言ひ訖て空に飛んで去る。

○念佛魚の事

三國傳記に曰く、梵に曰く、執師子國の西南に當て、海の上へ幾千里と云ふ遠きことを知らざる所に、一の島あり、東に望めば海漫々として水地軸を浸し、西に顧りみれば雲滔々として濤天隅に連れり、星落ては金の影かと思ひ、月沈ては珠の光りに似たり、人屋纒に五百餘家なり、是に栖む者ども皆魚を捕へて食と爲す、更に佛法の名字を聞かす、只舟船を家として釣を垂れ、風波を里として網を下すと業とせり。或る時數千の大魚海の濱に寄り來り、一一に人の物を云ふが如く、南無阿彌陀佛と唱ふ。海人等之を見て其の所由を知らざれども、唯だ彼の魚の唱へ言ふ故に阿彌陀佛と名けたが。人有りて南無阿彌陀佛と唱ふれば、魚漸く岸に近付く、頻りに唱ふれば

速に近付けると、其の魚を取て食するに肉甚だ味ひ美なり、然るに若し諸人能く唱へて取る所の魚の味は最上なり、少し唱へて捕る魚の肉は少し辛く苦し、之に因て一渚の漁人魚肉の味に耽著して阿彌陀佛の名號を唱ふることを業とす。然るに初め魚を捕て食せる者壽命終て三月の後ち紫雲に乗じ光明を放て、端嚴美麗の姿にて海濱に至り、諸人に告て云く、吾は是れ魚を捕し中の老首某なり、魚を捕ん爲めに南無阿彌陀佛と唱へし故に、命終の後極樂世界に生じ、刹那恩愛の別をば返て永く法界の慈悲と成し、須臾に骨肉の契を改て廣く無縁の利生に替たり、其の大魚は阿彌陀如來の化作なり、彼の佛の我等が愚癡を哀愍し玉ひて、大魚身と作り、念佛三昧を勸進し玉ふ、極樂世界と云ふは、是より西方に十萬億國土を過て有るなり、彼の國に生る者は皆快樂を受け、自然の裁縫の妙服を衣と爲し、珠玉樓閣の床の座を居と爲し百億瓔珞の銀釧あり、七重寶網の宮殿あり、黄金の池の底には白銀の沙あり、水精の池の底には瑠璃の沙あり、若し食せんと欲する時は

七寶の机現前し、五調の味鉢に滿ち、香美比ひ無く、甜酢意に隨ふ、食し己れば色力増長し、事己れば化して去り、時至りぬれば復た現す、人人願生すべし、今云ふ所を、若し信せずんば、當に魚の骨を見るべし、皆是れ蓮花ならん、諸人歡喜して捨る所の魚の骨を見るに、皆是れ蓮花と成れり。見る者感悟して殺生を斷して、眞實に阿彌陀佛を念せしかば、其の所の人皆淨土に生る、執師子國の賢大阿羅漢神通に乗じて彼の島に到る傳説する事斯の如し。

寶鏡窟之記畢

明治廿九年三月廿四日出版
 明治廿九年三月廿八日發行

金貳拾錢

版權所有

編輯者

山城國宇治郡宇治村大字
 五ヶ莊六十一番戶寄留

進藤端堂

發行者

京都市木屋町二條下ル
 東生洲町甲十九番戶

河村泰太郎

印刷者

京都市御幸町二條上ル
 達磨町平安印刷商會

村田三男三

發行元

京都市木
 屋町二條

貝葉書院

大賣所

京都河合文港堂
 同小川多左衛門
 同出雲寺文治郎
 同興教書院
 同顯道書院
 同藤井佐兵衛

京都飯田信交堂
 同藤森政進堂
 同大久保文林堂
 同澤田友五郎
 同大坂長尾種次郎
 同松本善助

東京森江佐七
 同鴻盟社
 同國母社
 同明教社
 同哲學書院
 同經世書院

東京出雲寺萬治郎
 名古屋三浦兼助
 名古屋三浦兼助
 神戶石丸日東館
 熊本長崎次郎
 長野西澤喜太郎
 米澤素月晨平

一切藏經

卷數六千九百卅卷
 冊數二千九十四冊
 紙數二百七十五張

映入全部正價金四百五拾圓
 十卷ニ付金七拾五錢
 外ニ金八圓假箱代金四圓荷造代

但一切經中何レニテモ端抜可致候

一切經目錄

和裝大本全二冊映入 正價金五拾錢 郵送費拾八錢

鎖眼版(通稱黃葉版) 大般若經六百卷帙入全部

極上等紺紙金泥、題正價金百五圓
 並上等白紙、外題正價金九拾圓
 外ニ假箱荷造代金貳圓貳拾錢

但一卷ニ付極上等金貳拾錢並上等金拾七錢五厘○無帙全部ニ付各參圓引
 同全部裏打金貳拾五圓増○同特別上等仕立天地金中金襴表紙綴帙入金五拾圓増

大般若經六百卷帙入全部

但無帙及裏打上仕立假相荷造代金共鎖眼版ニ同

本經ハ字體寸法卷摺仕立等都前比叡山版ト同様ニシテ只相違ノ點ハ眞蹟ニ目ノ草以テハ様
 無野ニ致シ有之完全無缺ノモノニテ紙質ハ極厚口字和島製仙華ノ上等ヲ用ヒ印刷鮮明製本
 入念ニシテ今般出版候ニ付廣告ノ爲メ當分右ノ大減價ヲ以テ貴需ニ應ス

右版元發賣所

一切經印房

(御注文御照會共一切經大般若經ニ限リ一切經印房宛○其他は都而貝葉書院宛ニ願上候)

